むくげの会 2009 新春四国合宿レポート

飛田雄一

ことしの新春合宿は、四国。10 人乗りのレンタカーに 10 人が乗り込んで神戸学生青年センターを朝９時に出発した。むくげの会の新人・小林は参加できなかったが、メンバーの７人と、合宿常連の島津さん、初参加の高田さん、ゲストディのゲストで学生センター朝鮮語自主講座の講師・魯恵英さんだ。

天気も上々、快調にワゴンを飛ばして、淡路島に渡る。通行料は高いが、10 人も乗ると楽勝だ。今回のフィールドワークの目的のひとつは、3 つの新羅神社を回ること。

最初の鳴門の新羅には、少々？迷いながらそれなりの時間に到着した。

鳴門の新羅神社

神木です

神木に、かわいらしい？オチンチンがついているのが有名なそうだ。

そして、屋島の発掘にも携わる山元さん、飛田の友人の安藤さんに合流して、

まずは、有名な讃岐うどん店へ。トッピングのイカ 180 円が特に有名とのことだ。うまかったが大盛はほんとに大盛で少々困った。

●

お腹いっぱいになって屋島に向かう。屋島ではこれ以上のガイドは望めない教育委員会の山元さん。城壁の発掘現場を作業員にどうもどうもと挨拶しながら、案内してくださった。そして、この松の木のラベルは何か分かるかな？　屋島の松の木も弱っているようだが、栄養剤を注入した記録とのことだ。よく見る一升瓶？を木に飲ませているやつだ。

屋島の発掘現場で山元さんの説明を聞く

松の木の飲酒ラベル？

讃岐護国寺、これはミニチュア

もうひとつの新羅神社

屋島を道なき道も、倒木もくぐりぬけて城壁あとをフィールドワークした。山元さんの分かり易い解説を聞いて屋島を約半周したのち、讃岐国分寺に向かった。カーナビのいうことを聞きすぎで途中少々危機的なこともあったが無事到着。一巡して最終目的地の善通寺市内の新羅神社をめざした。今回訪問よていの３新羅神社のうち本徳町のは時間の都合でパスしたが、後日安藤さんが訪問してその写真を送ってくださった。**（右）**

●

別子銅山・朝鮮人宿舎跡

夜は、善通寺市内で宴会と 08 年を振り返り 09 年を展望する会議を開いた。その会議録は、のちに掲載する。

２日目の目的地は別子銅山だ。『住友別子銅山で＜朴順童＞が死んだ』の著者・尾上守さんと松原満紀さんが案内してくださった。この本を『通信』163 号、1997.7 に私が書評を書かせていただいた本だ。また愛媛大学の伊地知さんと学生４名も合流した。

朝鮮人宿舎跡､第４通洞などを見学した。その大きさに驚いたが、山を越え筏津坑まで行って先の通洞から７、８キロも坑道があることに改めてびっくりした。実地学習は本当に重要だ。

第４通洞で松原さんの説明を聞く

筏津坑

朝鮮人の墓

ガソリン切れの恐怖にさらされながらも更に東平地区にも行き、立派な鉱山関係建築群をみる。

そして、来年の合宿は久々に韓国か、などと話しながら帰路についたのでありました。ご案内くださった方々、平均年齢を下げてくださった愛媛大学のみなさん、伊地

知さん、お世話になりました。

別子銅山・東平（とうなる）地区の遺跡

●新春放談の記録●

＜深田＞石人像をメインに今年も取り組んでいく。石は喋らないが多くのことを語っている。

＜山下＞朝鮮語に強くなりたい。風水地理の勉強を続ける。

＜堀内＞在朝鮮中国人労働者の論文をあと２、３本書いてむくげ叢書にまとめる。

＜山根＞08 年は朝鮮童謡の本を書いたが未刊。今年は済州島の歌碑研究もしたい。

＜寺岡＞播磨の本を９月に出版したい。皆で 9/23 出版記念パーティと決定？した。

＜信長＞08 年はアレンに取り組んだ。今年は近代教育をテーマに勉強する。

＜飛田＞今年もサイクリングネタしかないかと、悲観的決意表明。

夕食の宴会です

＜合宿参加記＞
お邪魔虫の独り言　高田

韓国語は勿論、歴史も文化も良く知らぬ老人ですが、ベテランの諸先輩の謦咳に触れれば、何か得る所があるだろうと、手前勝手な思い込みで新年合宿への参加をお願いしました。平均年齢を大きく引き上げたばかりか、皆さんの手足纏になるかも・・と内心不安を抱きながら車上の人となりました。

二日間の訪問先では夫々地元の専門家の方々にご案内を頂き、叉会員の皆さんが熱心に質問されるものですから、予定の場所をかなり割愛せざるを得ない結果となりました。

今回一番興味を覚えたのは、屋島の韓国式山城でした。高松市役所で発掘・修復を担当されている山元さんの先導で修復作業中の南の城門跡を見学しました。傾斜地に構築された「懸門」と言う珍しい構造でした。山肌の安山岩は焼け焦げのような色をしていました。更に林の中の斜面を上り下り、二本の大きな倒木の間を潜るなど、久しぶりの「薮漕ぎ」に必死で付いて行きました。魯さんが気にして所々手を差し伸べて頂き助かりました。

屋島城は 667 年、白村江の敗戦を契機に対馬の金田城、大和の高安城と共に築かれた防塁ですが、三箇所の中では一番良く構造が把握されているとか。周囲７ｋｍの城には2000 人程が配備されたのでは・・とは寺岡氏の説。只唐・新羅連合軍が攻め上って来るとすれば、進路からはかなり外れている様に思われ、戦略上どんな意味があったのかなど、あれこれと興味は尽きません。城と言うものは何故か男性を惹き付けるものですが、「女性は興味ないでしょう」と山下さんに尋ねると、「いいえそうでもないですよ」と意外な返事。

私の住む信貴山には戦国末期に松永弾正の拠った典型的な日本式山城「信貴山城」があったし、その西側には幻の高安城もある筈です。残念ながら足弱で探索出来ませんが興味は尽きません。

最後に２日間６１９キロメートルを終始沈着・冷静に運転して頂いた飛田さん、更に現地でご案内頂いた各位に心からお礼を申し上げます。